翻刻『曽根崎模様』（下）

翻刻の会

五冊　柳の馬場の段　結納に入ル物（三十七オ）

上へ別れ行。柳の馬場を。押小路軒を並べし呉服店。現銀商ひ掛硯虎石町の西側に。主ジは帯屋長右衛門町人ながら堂上へ。出入の門の目印シは井筒に帯の暖簾を。かけ直内義はお絹とて。爰等名代の器量よし人愛もよく見へにけり。地中主ジは留主の庭先キに駄荷の拵送り状。馬で大津へ幾固。手代丁稚も閙敷得意廻りに出る跡へ同じ隣の信濃屋から。丁稚が運ぶ台の物。巻キ樽持タせて後家のお石いそ〳〵として入来れば。地ハルお絹は頓て出迎ひ。詞お石様ンコリヤマアどふでござんすへ。さいな聞イて下さんせ。おまへのお里油の小路から私ジが娘お半ンへ参つた結納の印シでござんする。サア夫レ（三十七ウ）は私も知ッてゐる。なぜに納メて下さんせぬへ。イ、エイナア。戻しまするではござんせぬ。コリヤ松よ置ィていねと追返し。お絹様ンマア聞て下さんせ。お前へ持タして来た心はナ。預ッかつて貰ひましたさ。知ッての通り連合治兵衛殿は去年ンの秋過キられます。兄次郎吉は岩倉の滝へ養性にやりまして。内に居る妹のお半ン。おまへの弟御才太郎様ンの嫁にくれいとおつしやる。幸の事じやとお半に段ンゝ申ても。つんともふ合点ンが悪ルふて母の私が気の毒さ。長右衛門様はお留主成リあなたが内にござんしよは。合点のいく様にいふて貰ふと存じて待チ兼ておりまする。サイナ。夕べの夜舟なら今朝で有ラふと待チましたれど。今にまだ帰られませぬはいな。成ル程（三十八オ）お石様ンのおつしやる通り。こちの人長右衛門様がいはんす事はよふ聞入レてゞござんする。主が帰られたら私も倶々合点のいく様に申ましよ。サイナ此様に印シの数々

もマア〳〵隣へ預ケてくれ。夕べから気色が悪ルいと寝て計リおりまするハテ其様に気合に構ふ事なら。どふなとせふと気の毒ながら預ッけに参つた私が心。娘に甘いお石じやと必笑ふて下さんすなへ。ヲ、お石様ンのわつけもない。おまへなり私シなり。アノ子さへ得心ンなりや。一ッ家の結びじやないかいなア。アノ子も去年ンの参ン宮の時。長右衛門様のお世話に成ッたと本ンに〳〵。くどい程私に礼いふてゞござんする。殊におまへのお連レ合お過キなさつた治兵衛様と兄弟より念ン比に有ッた故。（三十八ウ）こちの人を死しやつた爺様の替りじやと思ふて居ると。モ夫レは〳〵私が傍共言ず。肩をもゝの足さすろのと。したゝるい程いとしぼがつてゝござんする。ホ、、、、。サイナ私よりませた事いふかと思へば。漸〳〵今年シ十四のお半ン。油の小路へいきやつてもおまへのいかい世話で有ラらふと存ジます。ヲ、何ンのいな。才太郎も此春十九で元腹させたりや相応な女夫中カ。内は仏壇商売なれど人に知ラれた爺様。幸ィの事じや迚取リ急いだ結納の印シ預カつて置キませふ。アイそんなら置て帰りましよ。いかひお隙を取リました忝ふござんする。ヲ、お茶さへろくに上り口。腰かけ咄し女ゴ同士お石は内へ立帰る。

地色中お絹はそこら片付て。待ッ間も昼に。なる鐘の。時キつく胸を押シ包ミ。大坂戻り（三十九オ）の長右衛門合羽の裾も大小も。与五助連レて内に入。お絹は待チ兼是は〳〵。今朝とふ戻らしやんしよかと待受ケておりました。与五助も太義じやマア〳〵休みやと勝ッ手へ立。地色ウ茶碗片手に煙草盆脱た合羽を袖だゝみ。アノ申シ大坂よりの荷物も届キ。遠州への荷物も今朝大津迄出しました。今出川への御状もさい〳〵夫レよ。幸右衛門様も一ッ所にお帰りなされたかと。地ハル問れてハツト長右衛門。ア、いや〳〵幸右殿はまだ跡に。大方今夜の夜舟で有ラふ。其幸右衛門に付ケいかい苦労をしたはいの。ヲ、そふでござんせふ。

マアちつとお休ミなされたら。何やかやお咄し申事も有リ。目出度事もござんする。したがモウお昼時お吉は何をしていやる。ドレ拵て上ケましよとお（三十九ウ）絹は勝ッ手に入ル跡へ。

片岡幸右衛門が父同苗幸之進。年シは六十に余りても袴の腰ものしめの着なし。今出川家の雑掌迚鰭有仁体一チ僕連レ。帯屋か門を差窺ひ。長右衛門戻ッてお居やるかと。ずつと通れば悔りし。ホウ是は幸之進様ハテお前は先ッ御息才てとあしらへば。ヲ、サ〳〵。年罷リ寄ッたれ共また此様に五調故。主人の用事に歩行申ス。扨何から申そふ。此間は大坂よりの書状度々到来致した。兎角丁寧な貴殿ンに引替族者の幸右衛門。目に余つて勘当した。お身か達而の侘言故貴殿にめんじ。赦すと其儘御婚礼の御用筋。大坂におる内も嘸々世話て有リつらふ。貴殿ンが下タつておくりやつたで此幸之進大（四十オ）舟に乗ッた様に思つていたてや。ナニ長右衛門。貴殿は夫レ顔色のすぐれぬは気分ンでも悪いか。イヤ何内室は奥にか早く薬リでも。ヤア幸ィ亀屋が霜台散が爰に有おませふか。アいや〳〵さしてどこも痛は致しませぬが。どふでもコリヤ夜船で冷が入リました物てかな。ム、そふ有ラふトレ〳〵薬おまそふ。イヱ〳〵私も用意がござりまする。ハテ遠慮のない事。ひらに呑やれと差出せど。差うつむいて長右衛門難波小橋の難渋を。夫と言ねは顔に出。胸せくるしき思ひなり。

ヲ、夫レなれば咄しは出来ぬ。一ト先帰つて後にこふ。ゆるりと休で養生めさ。お絹殿へも心へてと。訳ケを白髪の幸之進家来を。連て立（四十ウ）帰る。

門ト送りして長右衛門見馴レぬ白ラ台巻キ樽は。ハテ心へぬと夕飯やら。昼には遅き膳ンを廻りお絹が手づから持ッて出。幸之進様のお声がした。モウお帰りなされたか。ヲ、たつた今夫レそこへ。是はしたりマア〳〵おまへもひもじにあろサアお上り

と押シ直す。

ア、イヤ〳〵。大仏ッ屋で支度したりやまだ急に欲ふもない。そふしておきや〳〵。アノ樽や白ヲ台はどこからきたと尋れば。サイナ。何やかやめでたい事が有ルといふたはナアノ事でござんする。ム、めでたいとは先耳寄リ様子が聞たい。サアありや結納の印でござんすはいの。ムンこちの内へ結納のくる覚ェはないが。留主の内媒でも仕やつたか。アイさればでござんす外カでもない油の小路の親父様から（四十一オ）夕べ持タしておこしてござんした。ハテナ。そんなら何かそなたの弟の才太郎に呼でやるのか。アイ。フウそりやマア舅太夫も嬉しかろ。そして先はどこの娘じやや。アイ隣の信濃やのお半女郎でござんすはいな。ム、何といやる。アノお半へやる結納じや。アノお半へ。ホ、、、、。お前にいふたら悦んて下さんしよと戻らしやんすを待チ兼て居たはいな。ムンいやもふ悦ぶ段ンではない。余ンりでけふもあすも。イヤ何けふも明日も日が能げな。そしてお半もいく気で有ふ。サイナいく気ならよいけれど。嫁入リはいやじやといぢばつて寝て計リいやしやるげな。ア若又何ぞ外カに様子でも有ッての事かと。案ンじてお前を頼まし得心ンのいく様に言ッてほしいと母様の気（四十一ウ）もせ。成程主が帰られたら私シも倶に申そふと待兼たは右の訳。常々お前の言んす事はおう〳〵に聞てじや故。言を訳ケておつしやつたら得心もいき合点もし。談合が出来りや両方よし。ナアそふじやないかへ。ム、成程そりやもふいやる通り。得ク心さへすりや互の重畳。ハテ常々おれが可愛がつて置ッたお半じや物。随分ンとすゝめて嫁入リをする様。又得心のいく様に言ふはいの。ハテ其様に折角印シ迄来た物を変改も成ルまいし。聟といふはそなたの弟。嫁といふも念ン比中。コリヤとつくりと分別がと。両手を胸に思案の吐胸。吐息突より外ぞなき。

お絹は遁女の（四十二オ）情。ハテ何ンのいな。お前もかたい心から跡先を弁へて思案ンなさるゝは尤なれど。弥いやに極つたら印ンを戻す分ンの事。他人ではなし私が里。夫レに遠慮は。イヤ〳〵〳〵。一ッ家には猶義理が有。舅殿も人に知ラれたかうかつ人ン。おれじやてゝまんざらの町人ンでない此刀。他出の時は大小を赦され侍ィ並。サイナ。それもよう爺様が知ていさんす。石に根つぎをする様にいふて居ては埒が明カぬ百貫ンの鷹も放さにや知ラぬといふじやないか。マア〳〵私は隣へいてお半女郎をおこそふ程に。大坂戻りの草臥ながら得心ンのいく様に。進めて見て下さんせと。心も口も尻がるに いそ〳〵へ隣へ出て行。

跡見（四十二ウ）送ッつて長右衛門我カ宿ながら我心。千々に砕る憂苦労。大坂表テの首尾の上お半が事も思案ンの外カ。ふと馴初た縁ンにより。嫁入リをいやといふ心もム、此おれ故。女房が思はくお石殿の手前。モウ何と面が合ハされう。一一には又大恩ン有ル幸之進殿。悪人ながらも子を殺され。此儘で置カれふか所詮明日迄待タれぬ我カ命。ム、そふじや〳〵と独言。膳ンに向カへど中々に。喉へ通さぬ。胸の関。思ひ極めて立上り。店セに有リ合ふ硯リ箱。墨摺流し筆取ッて人目に何を書とだに。ゑやは咎じ罪科の次第を。紙にうく涙。同じ思ひを。信濃屋の。

お（四十三オ）半ンは夫レと聞よりも。内のつらさを振リ袖に顔を隠して走リ入。長右衛門様。と計リにて。詞は涙にこもらせり。ちやつと袂トへくる〳〵巻キヲ、お半か。此程は逢なんだ。息災で有ッたのと。表向キなる挨拶にお半はとかふいらへなく。ヱ、どんなわしや悲しい。わしや悲しいと。袂トに縋る其拍子。ばらりとひろがる書キ置見て。アリヤ何でござんすへ。イヤそなたが見て入ラぬ物じやと。巻キ納ればコレ申。お前は何で死しやんす。おれが死ヌとは。ソレ其書ィた物。死

といふ其死の字はと。いふ口押サへてア、声が高いしづかにと。見やる暖簾を押シ上て。
出るお吉が是は扨。おゑ様ンかと思ふたりや。お半様ンお出たか。コレハ（四十三ウ）本ンに御膳ンもすへたまゝ。よそへかへてと手をかくれば。ア、イヤ大事ない。〳〵此儘置。コレお吉殿ンよいはいの。わしが給仕をするはいの。アイ〳〵ほんに久しいお留主の内さい〳〵問にお出たなふ。そんならかへに来ておくれと。下女は勝手へ入ル跡に。ほんにお吉がいふ通リお絹もお絹じゃ。男に膳をすへて置ィてまだ戻らぬか。ヱ、尻の長ィ者では有ぞと。傍を詠メイヤコレお半。アレアノよふに祝言ンの結納はくる。嫁入リ仕やらざ成ルまいぞや。ヱ、。お前迄か其様に。モウ言出して下さんすなわしやいや〳〵。コレ申。長右衛門様。私が寺入した時は五つの年シ。お師匠様のおつしやるには。女子の子の嗜は。一ッ生に夫トといふ（四十四オ）はたつた一人リ。ふたりと持ッは女ゴしやない。女今川庭訓にも書ィて有ルとおつしやつたを。よふ覚て居る物。ソレ伊勢参りの下向の時。忘れはせぬ。夫トはおまへ一ト人しやもの。それに嫁入の何ンのとは聞たふもない私しやいや〳〵。誠無理にといはんすりや。わしや女の道が捨タる。お師匠様や。お絹様へ恥かしい。コレ申。お前のお帰りを待チ兼た此一ト通。是を読で下さんせ。是非嫁入レならわしや死る。死る〳〵と娘気の思ひ。詰メたるわりなさよ。長右衛門押開きつく〴〵詠メムウ扨は。押シて嫁メれば自害すると。某ンへの此書置キ。へヱ。是非もなき此しだら。我迚も早覚悟の身と。いふにお半が。ヱ、アノ（四十四ウ）そんならお前も覚悟と言しやんすは。ヲ、驚きは尤。其死ヌる子細を言ィ聞さんと。懐中より取リ出すは。傘の誓紙のまくり紙。コレ是を見や此血は。平野屋の徳兵衛といふて現在のおれが弟。天満やお初と言かはし。死ニに出る場へ行キ合セ。心ン中を留トめた血判。其弟が難ン義から。ぜひなふて此長右衛門。人をあやめた

事も有。ヱヽイ。サ其場で死るおれが命。おれが死では弟が難ン義。徳兵衛女夫が可愛さに。おれも死ナぬといふ血判。ハツア勿体なや。仮にも天満ンと書イた傘。血を怪したる神罰かと。思へば空。恐しし。

殊にそなたも其様に。嫁入リをいやじやといやるのも。よしないおれが有ル故じや。母様の手前お絹（四十五オ）が心根油の小路の舅迄。三方四方へ義理の命。死ねばならぬ長右衛門。トハいへそなたは又格別。よふ得心をして見やや。おれは今年卅八。そなたは漸十四の花。莟にもならぬ身を。よい年をしてだましたと笑はるゝは知レた事。手習のお師匠へ恥かしいとは尤ながら。コレ爰をとつくと合点しや。おれが事はない昔じやとふつつりと思ひ切。油の小路へ嫁入てたもれば。母御へは大孝行。又おれが身も思やる同前。ノそふじやないか。サアどふぞ聞キ訳てコレ嫁つてたも。アヽこんな事とは夢にも知ラず。女房お絹が頼ンでいた手前と言イ。おふくろの心根。世間ンがどふも立ぬコレお半。思案ン仕替て見やいなふ。やいの〳〵となでさすれど。（四十五ウ）へいらへはかぶりふる計。悪縁ン深きしるしなり。

アレ〳〵お絹が戻るぞと。我書キ置を刀の柄へ誓紙も倶に巻込ンで。柄に袋を打かづけ空さぬ。顔して居る所へ。

戻るお絹がても扨も。マア〳〵わしとした事が旦那殿へ膳ン出して。給仕をとんと忘れていた。是はしたり爰な子は。俯ていて済ムかいなふ。旦那殿どふじやいな。サア頼ンで置キやつた一ト通り。口のすい程いふて見ても。まだ得心ンがないそふで。おりやモウ男が立タぬはいの。サア私シも弟や爺様へ申訳が立ませぬ。コレお半ン様。何やら咄をせふと思ふた。ヲヽそれ〳〵去年のソレ夏で有ッた。こな様ンと連立て大坂へ下つた時。中山文七が芝居でした。八百やのお七を見て戻ッた夫から夜船の口々（四十六オ）に。イヤお七をよふした可愛らしいといふたれど。わしやひつとつもかはゆふないなぜといはん

せ。マア〳〵有ふ事か。八百屋の内が類花に合。寺へ退ていた内に。小性吉三に心をかけたが悪事のもとじや。言名付ケの武兵衛がお七を女房に持タふ為。だいまいの銀出して。元トの八百やの普譜もでき。内へ戻ッて居る内も吉三に逢たい〳〵と。下女の杉を媒にて。文のやりくりばつかりで思ふ様に逢レぬ故。今ン度も家がないならば又寺へいて逢れふかと。娘心に思ひ詰メ。又も火難の其後チは恋しい吉三に逢事か。江戸中を渡されて。浅ましい死をしたといな。コレお半様ン。おまへはそふではないけれど。芝（四十六ウ）居事も余所にはない。誰ガ身の上にもよふ有事。嫁入リをいやといはんすは。ム、但し外カに言イ約束でも有ルといふ。ハテ夫レもないならひじやない。有ルなら有ルとナ旦那殿。そふじやないかへ。ムン顔ふらんすはそれでもないか長右衛門様と。いへばぎつくり胸に釘。そんなこつちや有ルまい。したが其様にきめ往生にいふても済ぬ。マアいんてお半とつくりと。お袋共相談仕や。サア〳〵いにや〳〵と手を取レば。只アイ。〳〵となないじやくり是非も。泣ク々立出る。

ホこりやどこも店さし時。コレ女房。おりや祇園様へ参ッてこふ。アイそんなら早ふお帰りと。お絹は奥へ別れ入。後の哀レを知ラぬが仏ケ。向ひの寺は門ンしめるこなたは大戸引しめる。（四十七オ）人顔見へぬ夕暮レ方。お半はいかゞ気遣しと。くゞりを出る長右衛門。夫レと見るよりしがみ付わつと泣出す声に恟り。お半そなたは爰に居たか。アイわしやモウ内へはいにませぬ。お前に逢ふ計に。今迄生キて居ましたと。剃刃取出す其手を取。コリヤお半スリヤ最前段ン々の異見も聞ずム、扨は弥死る気か。ハア何ンとせう是非がない。死損へば恥の恥。モウかふ成ルからは一ッ所に死んサア〳〵おじやと夕間暮。上の町からくる挑灯。アレあれは片岡幸之進。急ぎのていは気遣カはしと。胸にこたへし我カ身の上。逢てはいか

〻と用水の。小陰にこそは忍び居る。

家来を先にいつきせき。息キも片岡幸之進。差札片手にかけあがり。長右衛門長右にあはふ（四十七ウ）気をせく声。お絹が聞付是は〳〵よふお出。こちの人はたつた今祇園ン様へ参るとて。いやさ〳〵。早く呼にやり召サれ。そんなら茂兵衛呼ビにいきや。はつといふより出て行。

コレサ内証。大坂より早状がきた故に。急に逢ねば叶はぬと。いらつ老人落チ付クお絹。おまへはいかふおせきあそばすが。お急キなさる、御用でも。イヤサ商売の事ではおりない。躬レ幸右衛門は切ラれましたはいの。ヱ、イ。そりやマアどこでと驚ば。サア大坂にて。平野屋の徳兵衛が切ッた共。いまだ其沙汰分明にはなけれ共。合点のいかぬは最前ンきて。長右衛門に逢た時。済マぬ顔も気遣はしく。其徳兵衛は長右の弟。日外爰へき合セて近カ付に成リ申た。長右と違ッて（四十八オ）ひがいす者夫レはとも有。ヱ、早く逢イたいと。見やる傍に残した刀幸之進取リ上て。ムン此小柄カは拙ッ者がやつた後藤が唐獅子。覚へ有此刀と。引抜ク切先キしたひし生血。扨はと驚其内に。柄袋より落チちる一ッ通。お絹が拾ひコリヤ何じや。幸之進様へ。お絹殿参る長右衛門。ドレ〳〵〳〵と幸之進。一通手に取押開き。何じや書残す一ッ札。ヤアとお絹が仰天。そんならアノ死にいかしやつたか。わしも倶に追ッかけてと。立を留めて幸之進。マアコレ書キ置を。聞たが能イと声しはぶき。ア此度御用を承り大坂へ下る所に。堂島難波小橋において。幸右衛門殿某を待伏セ。欺し打に逢べき所運に叶ひ。幸右衛門殿主従二人を切留。直グに切ッ腹と存候へ共。（四十八ウ）御用かけ候ては不忠と存。未練ながら立チ帰り申シ候。ムンそふで有ロヱ、武士に似合ぬ。待チ伏とはにつくいやつ。長右が手に懸討タれたは。コレまだしも躬レが仕合セ。それ

〳〵お絹。こなたも読で見られよと。渡タせば取ッて泣々も。信濃やのお半ン事。幼少より我カ子同然にもり育。去年ンの春伊勢参宮に同道せしは。悪縁ンの始メかと存ジ候。道々大切にせし余り。お半も又我を大切ッがり。夫レとはなしに戯が誠ト成ッて。縁を結びし事。不義の段ン々詞にのべがたく候。ヱ、そんならお半殿にも様子が有ッた事かいな。そなたを始メお石殿の手前。此度縁辺を妨候も我レ故と存候へば。生キて顔立チ申さず死るより外なく候。去ながら幸之（四十九オ）進殿のお影により。侍ィと成ル身に畜生の魂が入リ替り候故。刀脇指にては死ナれず。いか成渕川へも身を投申候。ハア〳〵悲しやと身を打臥正体涙に。くれけるが。ヱ、アノ子と二人が中露程も知ラなんだ〳〵。たとへ又私が知レた迚。コレ何ンといはふぞ。わしや是何共言ぬ気は。日比よふお前知ッてゞないかいな。去ながら私が様な者でさへ。女房しやと思ふて私を立て。隠さしやんした心根が猶いとしい。長右衛門様とぶぞ死すと最一度。顔を見せて下さんせいなふ。跡に残ってコレわしやどふせふぞいな。幸之進様どふしませふ。皆もこい〳〵呼ンでこい。私もいかふと立足さへ。力ラも落て其儘に。お上にどうど伏まろび。声（四十九ウ）を計に歎キきしは。断と。こそ見へにけり。

幸之進も目を摺て。ヲ、道理〳〵。ヱ、此親が了簡すりや。死るには及ばぬ物をと懐より。金子の包を取出し。差札に押シ並へ。是此ごとく用意せしは長右衛門を思ひの余り。大坂より早状の趣見るやいな。突キ詰た長右衛門かふ有ロふと察した故。遠ン州には今出川の領地も有リ。一ト先遠州へ落してやらん。其為の此差札。道中筋は心の儘。遣ひ寮には此金子五十両迄持ッて来たに。ヱ、残念ン〳〵。実の躰レは何共思はず。どふした縁ンかアノ長右衛門。後チ々はおれが子分ンにして。片岡の苗字を譲らんと迄思ふたにノウお絹。さも有レ何国の渕川ぞと。また（五十オ）取上て幸之進お絹もなく〳〵く

り出す内。包込ンだる誓紙の血判。是々爰に此事がと。又読上る涙声。弟徳兵衛お初が命助ケん為。我レも暫ラく生キ延たる命代りの此誓紙。人の善ン悪さへ見分ケたる我成レ共。我身の上は目に見へず。うか〳〵見ていた夢もさめ。油の小路の舅殿お石殿。取リ訳て恥しきは女房お絹。人ならぬ此おれに貞節を立テ。其札をさへいふ事か。因果な縁ンにからまれて。心ざしも無足と成リ。亡跡迄浮キ恥を晒候。最早人間ンの交ならず。犬猫に同じ最期の有リさま。必々仏の前へ手を合し一遍の念仏水一ッ滴。香花迚も無用に候。只面ン目なきは幸之（五十ウ）進様。人ならぬ某を人と思し召。御一ッ子にかへての御憐愍。思ひ出すも勿体なく存候。余り〳〵悲しく候て。筆の立ども跡や先。申シ上度キ事は海山に候へ共。心に余り詞に述がたく候。大坂天満宮の氏地に置イて相果ッる身に候へ共。古郷の方もなつかしく。桂川に沈む者也。ヤ扨は桂川へ身を投ゲにかいの。いとしや〳〵ヱ、かふいふ事をとふから知ッたら何の〳〵。油の小路へ縁ン組の約束をせふぞいな。此書置を見る内も此身が此身で恥しい。お半様さつきの様に異見したも何もかも知ッて居て。悋気でいふたかと思ふてゞ有。何のさら〳〵わしや知なんだ〳〵そへこらへて下んせ。ヤヤ。ヱ、どふぞ。モ一チ度逢たい見たい言訳がしたいはいの。大事の〳〵隣の娘。あつ（五十一オ）たら男を死すもわしが業じや。どんなからしや。ひよんな結納の印を預ッかつたも。かふ成ル知せで有ッたかと。台も手樽も打付ケ投付身を投付。倶に死んと身もだへしうさもつらさも一時に涙。果しはなかりけり。

折しも来る隣リのお石。申シ〳〵お半はお前におりますかな。ヤアお石様か扨はお半様も内にじやないかへ。ハア、。コレ〳〵申〳〵長右衛門殿が此様に書キ置を残し置。お半様と一ッ所に桂川へ死にかと。聞イてお石が気も狼狽何で〳〵どふしてと。問どこたへも幸之進。様子は道々我レは駕の用意して追ッ付行。早ふ〳〵と進められ。与五助が挑灯にお絹が急げばお

石も倶に。跡をおちや横切レに。今迄忍びし長右衛門お半を肩に引かけて。桂は西に照月の足に。任せて三重（五十一ウ）

道行浮名に入ル物

二人半太夫
月かげの。流るゝ方へ行我レを。もしやはたそととふならば。つゆと答へて。消なまし。それは昔の。芥川是は。桂の。川水に。浮名を流す身の上と。思ひながらも分別の外の重荷の恋衣。かたにあふせの悪ク縁を。結ぶ帯屋の軒もはや。遙隔て見返れば。町を放れてやう〳〵と背をおろしてとり〴〵に姿繕ふ心根は。まだ娘気の跡やさき。死に行身と覚悟して。歩むぞ。へ思ひ。やるせなき。男は跡にしほ〳〵としばし（五一二オ）たゝずむ其ふぜい。○地お半はふしん立よりて。おまへは何してゐさしやんす。サアござんせと手を取レば。サイノこゝは三条あたご道。露の命の置キ所。草葉の上と思へ共。何やかやと義理あれば刃では死なれぬゆへ。渕川へ身を沈るがせめてもの言訳と。くはしく書て置キたれば。今比は嘸ひらき見て。サイナわたしも爰に放さぬは。○色おきぬさんへの申訳。二人中ウこうぢ油の小路へわたしをば。嫁にやらふと。真実なお世話を無下にさせましたも。かうして一ツ所に死たい計リ。合上昼も昼とて様々と。大坂で見た富十郎の。○色合二人ウ八百屋お七の狂言まで。合あれが手本ンじや異見じやと（五十二ウ）芝居咄しを言出して。おまへとかうしてゐるとはしらずかう出た跡で。○色嘸や嘸呵つて計リゐさんせう。堪忍して下さんせとわ。ひる涙も一ト筋におほこ。育といちらしし。二人中ウ道理〳〵といさめられ行は野すへに犬の声。身にしむ風にさそはれて。アレ壬生寺の鐘の音九ツ。爰に。北みなみ。東寺はあれよ西の寺朱雀の。火かげほの見へて心ほそ道。まがい道。行道すからわすられぬ去年の参宮の道ぐさに。関の。お地蔵は。親よりもましし似合の。つまつぢとうたふ馬子の歌のふし。下向の宿は坂の下つゐ手枕のかりねして。あいの（五十三オ）土山。雨よりもぬれたどふ

しと水口のわる口がソレ縁の端。かたい石部の。お前迄。今此やうに成りはつる事とは。しらず跡の月。アノ清水のぶたいから飛ンで命の有ッたのは。願ひのかなふ。印シじやと悦んでゐた物が。不義な恋した報か罪か。観音様の御罰か。ハテ何事も書置キに跡で様子は知レること最早桂に月の足。アレ〳〵〳〵。後へ見ゆる火の光り。追ッ手の者に逢ぬ内。覚悟はよいかと夕露の。消る氷のふち瀬川石を。袂に。糸と針。しゆすの帯屋と信濃屋の娘〳〵と呼ブ声に見付ケられじと手を引て。こけつ転びつ牛が瀬の水上。へとぞ。三重上へたづね行（五十三ウ）

七冊　桂川の段　水に入ル物

ヲ、イ〳〵。長右衛門様ィのふ。旦那様ィのふ。こちの人ィのふと。呼も叫も涙声。

地色お絹が先に与五助が挑灯の火も薄ぐらき。桂川迄走リ付そこよ爰よと尋ヌる内。又も跡から。娘ィのふ。おはん様ィのふと呼連レて。互ィに顔を。ヤアお絹さんか。お石さん道々申た入リ訳。堪忍して下さんせとわつと歎けばもろ共に。涙はらふて。申々わしやもふ心がうろたへていつそ何ンにも覚へませぬ。かふいふ内も気遣ハし与五助殿も尋ねてや。アイ〳〵川上へは庄六茂兵衛が行キました。地色サア〳〵こちへと進る所へ。乗物釣ラせ幸之進息をはかりに尋ねきて。コレハ〳〵お絹（五十四オ）殿嘸や何角をさつして居ます。シテ成行は何ンとでござる。イヱもふとんと知れませぬ宵から方々尋ぬれど。ヲ、道理〳〵此幸之進も来る道々。日比念ンずる仏ッ神ンに皆長右衛門の命乞。ア、かふいふても済マぬ事。夜明ケぬ内にそれ〳〵と川上ミ川下モ森林。尋ねさまよふ其内に早東雲に。程ちかく鳥の鳴音もほの〴〵と。見へ渡りたる川筋を。流カれ来タるに目を付ケて。ヤア〳〵家来共怪や夫レといふ声に。ハツト答へて下部共てんでに。飛ビ込ミ游付キ。ヤア〳〵是は死骸

じやと。聞より人々ハアはつと驚く内ニに引キ上れば。

ヤアこりや娘。こちの人。なふ悲しやと取縋り。わつと泣出す恩愛の。涙は野辺に渕なして又も。其身や沈むらん。（五十四ウ）幸之進もせぐりくる。涙ながらに死骸にむかひ。ヱ、日比に似合ハぬ一ツ徹短慮。今いふたとてかへらねど案の外カなる此有リ様。いかなる縁かか程迄疎略にせざる我心ン底。天ン道夫レとしり給はゞなぜ引キ留メては給はらぬ。ヱ、残ン念ンやと拳を握り悲歎の涙にくれにける。始終正体泣キ入リしお絹は顔をふり上ケて。コレ申お石様ン。おまへは又其様に泣イてばつかり居さんせずと。せめて名残に死顔をとつくりと見て上ケまして。ヲ、現在娘の顔じやもの見たふて〳〵ならね共。さつきに一ト目見た時に何ンやかやを思ひ出し。二目ととふもわしや見られぬ。見られぬけれど我カ子の顔。見たいはいのとかきくどき。死骸に取リ付キ抱付キ又も涙に。伏沈む。歎キの中カへ（五十五オ）手代の茂兵衛。息キ継あへず。申々氷が渕の岸のうへ脱捨て有ル此草履。見れば何やら書イた物がくゝり付ケてござりますと。差出す草履目早くもお石が取ッて。コレ〳〵此草履はきのふあの子が買ッたのじやはいな。ヱ、そんならそれはおはんさんの書キ置キかへ。夫マアちやつと〳〵。あいといふ間も胸ねせかれ。開く手さきもふるひ声。何から申シ残さんやらあんじに暮レて書キ参らせ候。申シたい事山々ながら只気にかゝるはお絹様への申シ訳ケにて候。去年ン参宮の時もわたしが好イた折鶴のもやうの湯衣。手づから仕立テて下さんす。ヱ、かはいや何ンの湯衣の礼所か。其上ェ道て風ひくな。ちつとでも寒いならこちの人の綿入羽織。遠慮なしにきたがよい。もしおなかでもい（五十五ウ）たいなら此お薬リを朝々呑といふて下タさんす。ほんに〳〵真実の妹か娘のよふに思召ス。お絹様への申シ訳ケ。わしや是計リが気にかゝり参らせ候。どふぞ堪忍なさるゝ様に詫言頼ミ参らせ候。コレマア

是程ながい書キ置キにわしが事は何ンにもかゝず。おまへに詫言ばつかりを書たはいな。是がおはんが筐かと。顔にあて身に添て声をはかりに泣入レば。お絹も涙。留め兼ね。夫トの歎キいやまさる。涙ながらに。ノウコレ〳〵何の腹ラを立テませふ。末を私シが読ますも。あの子の迷ひはらすため。ナニ〳〵詫言頼ミ参らせ候。ついてはわたしが徒の申シ訳ケを致シ参らせ候。色とやら情とやらわたしはさら〳〵しらぬに候。あの長右衛門様の事は皆人さんか打よつて。明ケても暮レてもほめて計。夫レでわたしもよいお方タと思ひ染参らせ候。かへす〴〵もお絹様（五十六オ）の手前。とのご盗ミし同然と一日〳〵気の付ほど悲しく思ひ参らせ候。只此上ヱは後生じやと思召。お絹様の堪忍したとおつしやる様に。呉々願ひ参らせ候。南無あみだ仏ッ〳〵。なむあみたぶと読終。かつぱと転び泣キ出せば。母は猶さら身の上にかゝる歎キのうさつらさ。並居る人も諸共に咽。入こそ道理なれ。

お石は又もくどきごと。おまへが書キ置キよんでの時。コレ此娘が現在に物いふ様な口元を。見れは見る程いぢらしい。堪忍したといふことを聞カしてやつて下タさんせ。ア、申何ンのいな。此書キ置キを見るに付ケ。皆ナわたし故死ンでのじやはいなふ。コレ〳〵〳〵堪忍せいで何ンとせふぞいな。かならず迷ふて下タさんすな。よい所へいて下さんせへ。コレ申シ長右衛門殿。長右衛門様ン。早まつた事さしやんしたので。幸之進様のお志もむそくになつたはいな。何やかや（五十六ウ）ぎりの立タぬ事思ふて。嘸おまへの身にお前があいそがつきたで有ロけれど。わしや一トつもあいそはつきやせぬぞへ。此世に心残さずと成仏して下さんせへ。何ンの恨が有ロぞいなと。声も涙にせぐり上ケ又も。つきせぬ歎キ也。

涙ながらに幸之進時刻うつると立チ上り。ヲ、旁の歎キ尤ながら。日も立登らは人目も有。二つの死骸引キ分ケて長右衛門

は我手にかけ。怜レが敵討たりと披露せん。マツタおはんは狂気の上。水に入ッたと言ィふらさば心中の名をのがるべし。是が二人リへ幸之進が追善也と立かゝり。縫合せたる。裾と裾とかんとすればお絹はとゞめ。娘心に糸針迄用意して。縫合せたる心根を思ひ廻ハせばいとしぼい。廿四時が其間は魂其身に有と聞ク。せめて一チ夜は此世にて女夫にするがわたしが追善。やつぱりそふして置ィて下さりませ。ア、忝いおきぬ様お前が常の姫ごせ（五十七オ）なら。娘が死骸切リ刻もせふ突もせふ。夫レに引キかへ深切な。其お詞は娘への千ン部万ン部の経だらに。お前は神か仏かと手を合ハすれば。アノまあお石様ンのおつしやることはいな。わたしが真実いとしいと思ひ込ンたアノ子じゃ物。悋気しつとの段かいな。コレ〳〵おきぬ様其お詞か猶じゆつない。ハテかふ成ルも前生からの約束でかなござんしやう。サアそふ言ハしやんすりやわたしが身に。イヱ〳〵わたしが。イヤわしがと。互イに手に手を取リかはし。ぎりを立テぬく心根を思ひやられて哀なり。斯ては果じと幸之進。二人の死骸を乗リ物にのせて。かき出す小笹原。是や誠ののべ送り夫と娘に愛別の。つきぬ名残を彼岸に。おくる弘誓の舟岡山。やがて煙ときへ果る。氷リが渕に沈む身も真如の。月の桂川涙。残して三重へ立かへる（五十七ウ）

八冊　平野屋の段　戸棚に入ル物

商人のよき絹畳。内本町。外トは格子の角屋敷キ名は平野屋の久右衛門。常も始末の内普請。壁の崩をこて〳〵と皆手細工の下タ地縄。長蔵も手伝ふて。茄を切ルやら土に水溜　醤油のおろし売り。渡世も辛き手業なり。

長蔵殿はどこにぞと。立出る女房のお種。ヲ、こちの人そこにかへ。アノ灸はどなたが居なさるゝと。尋れば久右衛門。

ヲ、おれがけんべき居るのじやが。マア徳兵衛からすへてやりや。アイ〳〵。そんなら左様といふ所へ。と、様お茶を上ましよと嫁のお北が心の端香。（五十八オ）ヲ、こりやよふ気が付キました。どれ〳〵と。茶碗手に取ヤイお種。徳兵衛が灸は。此お北にすへさせい。ハテあれと女夫にせふ為に。貰ふて置ィた在所の娘。あの徳兵衛は天満屋のはつに気を取れ。お北が顔は見向キもせぬ。京の兄の長右衛門が連レて戻つて。此間は門へも出すなと頼ンだ故。二階住居させて置ィた。外を家にした若い者。気詰りにあらふかと養生薬も呑ンだ上。マア灸もよからふと。玄伯がおろしてやられた。ヤ夫レはそふと。九平次めが掛物を戻さぬ故。町所へも断て置たが。何とぞいふて来そふな物じや。ナア長蔵。おりやちよつと宿老殿迄尋てかふかい。いか様左様になされませ。ヲ、いて（五十八ウ）かふ。コリヤ長蔵。爰はもふよい。そちらの壁へ間渡し入てかいて置ヶ。ヤイ〳〵お種。艾もたんとひねつて置ヶ。コレ〳〵お北。徳兵衛を呼ンですへてやりや。ドレ〳〵羽織と肩にかけ。コリヤ〳〵お北。何が悲しうて泣ク ぞいやい。我泣のはかまはぬが。此様にあつたら紙を費が勿体ない。ア、若いはよいが。しどがなふて気の毒じやと。落たる紙を拾ひ上。袂に入て出て行。

長蔵跡を打ながめ。ア、いとしや。甥御にかゝつていかひ苦労をなさるゝ。お北様。灸の拵なされませ。女房共。何をうつかりとしてゐるぞ。連レまして奥へいけ。おれも為業を片づきよと。立ッをお北がコレ長蔵。徳兵衛様の灸なら。わしよりはお初殿を呼ンで来て。すへさしたがよいわいの。わしらが（五十九オ）様なふつゝかな在所者。何のあなたが気にいらふぞ。ハ、、、、。お北様こりや。灸よりひぞりじやな。サア跡で旦那もすよふといふてじや。艾も箸も袋棚に入て有。ドレ出してやりませふ。サア〳〵早ふござんせと。二人を伴ひ入にけり。

うきことの。数重なりて。山鳥の隔て住ムは。春の草。今は便リも夏の空。お初は人目まばゆさに包む。帽子も平野やの。軒端にたどり来りしが。ア、嬉しや。マア爰迄は北がいの。壁の崩に身を寄セて。内の様子を窺ひゐる。同し思ひに徳兵衛も。二階をそろ〳〵。段ばしごおりると出ると顔と顔。徳兵衛様。長蔵か。アイ。いや申。おまへは気色が悪ルい迚寝てござつたけなが。ちつと様子が。イヤもふ大分ンよいわいの。薬も呑ふし。灸（五十九ウ）も下タですへて貰をと思ふて。アイそれ〳〵。女房共やお北様が拵てゞござります。イヤ申。旦那殿の留主の内。ちよと申シたい事も有。マア〳〵下にござりませ。アノ。ゆふべ段々わつつくどいつ異見が有ッた。其尾に付イて。アノお北様と女夫に成て此内を納め。旦那には隠居させませふとおつしやつたが。ヲ、そふいふた〳〵。夫レが何とぞ。サアそりやはや。あの様にお前を太切ッがつてお世話なさるゝ。其手前を思ふてナ。心には染ぬけれど。マア当座の間に合に。いはしやつたでござりませふがな。ア、いや〳〵。間に合じやないぞや。真実お北と女夫に成ル。合点じやわいのといふ声を。外に立聞お初が恟り。長蔵が押シかへし。アノそんならお初ッ殿の手を切てかへ。ヲイノ。いゑ〳〵合点が（六十オ）いきませぬ。今の様にいはしやつても。つんと誠と思はれぬ。どふでも無分別が出そふで。気遣ヒに存ます。是はしたり疑ひの深い人じや。何でおれが無分別を出す物で。サア、、、、。夫レなら二階に居やしやる筈。人のない間を考て。爰を出よとの事じやあろ。ヱ、聞へぬ徳兵衛様。今迄何べんか申ス通リ。なぜ私に隠さつしやる。今いはしやつたが定なら。元トの二階へ上つて下され。灸もそこへすへにやる。コレ申。無分別の出ぬ様な。思案をしかへて下さりませ。コレ申拝ます。拝まするとと手をすつて。真実心の異見也。

詞コレ〳〵。其様に拝ンでたもると術ない。何々の誓文。無分別の出ぬ証拠といふは。お初とは手を切ッたぞや。ムンそりやとふして。いつ切ラ（六十ウ）しやつた。ハテお初が兄が天満やへ。金を渡して隙を貰ひ。外で男を持タすげな。ハテおれも手を切ラねば。お初が為にならぬ故。さつぱりと思ひ切た。是からもう〳〵心を入かへ。お北を女房にして。伯父者人にも孝行にするわいの。神仏を誓文に入るは古ルい。京の兄貴が川へはまつて死る法も有レ。微塵も嘘はつきやせぬと。つゐいふ事も天然と血筋がしらす哀さを。外トにはお初が聞クつらさ。立ッたり居たり腹立涙。長蔵も目を摺て。モウ〳〵よごんす。兄様迄誓に入てのせいごん。落付キました。嬉しうござるといふ後へ。お種が立出コレ長蔵殿。艾はたんと有けれど。灸箸がかたしもないぞへ。ヱ、夫レ出して置たはい。柳行季の中に有ル筈じやが。（六十一オ）テモあの中にはないわいのふ。見て下んせと気をせけば。ヱ、埒の明カぬ者では有ぞ。ドレ尋てやろ。イヤコレ徳兵衛様。お前はやつぱり二階へと。言捨奥へ行跡に。人間を待てゐるお初。壁の破をおづ〳〵と。くゞりはいるをよく〳〵見て。お初じやないかと走寄リ。詞マア〳〵大たんないつの間に。どふして爰へおじやつたと。とへど涙にむせ返り。ほんに〳〵今の様な。どうよくな事がよふいはれた事じや。わしやさつきにから爰へ来て。いはんした事はよふ聞た。兄様が金立テて。隙をもらはんすの何のとは。サアわしが合点したかいな。コレ勤こそしたれ。わしやお前に微塵も嘘はつかぬぞへ。譬どの様な身に成迚。こな様ンを見捨て。外の男に添様な。心じやと思ふて（六十一ウ）かいな。夫レにマア胴欲な。わたしとは手を切ッて。お北様と女夫に成ルといはんした。是程に思ふてゐる物。能添そふわいな。サア〳〵今爰でそはんせ。〳〵〳〵。よふあんな事いはれたな。聞へぬ人やと計にて声も。得立ぬ忍び泣。コレ〳〵。夫レ聞きやつたら腹立は尤。マア泣ずと是を見やいのと。懐から

出す一通は。ヱ、。こりやおまへ書置キ。サア。しりやる通リ此おれを。不便がらしやる伯父者人に。勿体ない嘘八百。真実と思はして肌ゆるさせ。首尾を見合せ爰を出て。そなたを尋にいく工面。天満屋の庭でしらした通リ。二人一所に死る覚悟の此書置キ。ヱ、嬉しうござんす。忝い。サアわたしもよもやと思ひながら。便宜はなし気が気でなし。爰へ尋て来る迄はお前に別れた難波小（六十二オ）橋。与五助殿をだましていなし。わしや夫レから福島の。お針様ンの所にゐたはいな。お前に逢たら何やかや。言たい事も有ルけれど。かふして居て見付ケられては。ヲ、成程〳〵。おれも今迄此二階に。隠す所は大分ン有。夫レでも誰レぞが上カつたら。イヤ〳〵おれさへ下に居りや。誰レも上カる者はないわいの。マア待ちや〳〵。人のない間に脇指をと。そつと戸棚の引出しから取リ出す。間タも気をくばる。

お初が見付ケて。アレ〳〵〳〵久右衛門様の向ふから。ドレ〳〵。ほんにこりやならぬと。いふ間も明イた上戸棚。マア〳〵爰へと手をそへて脇指迄もきり〳〵しやん。そしらぬ顔して居る所へ。内入も能ク久右衛門。コリヤ〳〵徳兵衛。もふ灸はすへ仕廻か。ハイ。いやまだでござります。ムンまだじや。ヱ、あいらは何をしてゐるぞいやい。長蔵（六十二ウ）よ。お北と呼声に。ハイと行燈に火をともし。もたれは幸イ箱床几勝ッ手屏風を引キ廻せば。お北は土器火入の火。燃る思ひにあらね共夫レとはいはでさし艾。差うつむいて襟に顔。徳兵衛は只うろ〳〵と。戸棚に心うつ蟬のからき命の際ぞ共。しらぬ仏ケの久右衛門。徳兵衛下に居やいなふ。お北よ早ふ居ぬかやい。ヱ、初心ンな者では有はいのと。いへど返事も泣声も。艾の数に紛れけり。

コリヤ長蔵。おれも跡で相伴する。ちつと肩をもんでくれ。ヤレ〳〵〳〵〳〵肩がつかへたと。諸肌ぬげば立廻り。ホウ

こりやいかふつかへてござります。旦那には灸上戸。徳兵衛様は嫌ひじや故。うぢ〳〵としてござる。したが甘い物を喰よふにやなけれど。其代は後ヂ薬と。咄シしかけて揉内に。戸棚をそつと明ケかけて。お初は指ざし仕形して。（六十三オ）お北にすへて貰ふなと思ふ心を打點く。二人が仕形を長蔵が。ちらりと見付る戸棚さす拍子はひつしやり。アイタ、、、。エ、もつとしづかにもめやいと。いふもうつかり現の手元ト。久右衛門捻向て。長蔵。〳〵コリヤ長蔵。ワリヤどこを揉ぞいやい。一ッつもこたへぬがな。アイ〳〵〳〵。といふよりとん〳〵。ヲ、よいぞ〳〵。いかふ上手に成おつた。ヤイ徳兵衛。まだかいの。ハイ〳〵。今すへまする。ア、どふやら風を引たかして。咳が出そふでつんともふ。ムンそりや痰のわざで有ふ。痰切リにはよい練薬。ソレ〳〵戸棚に入ておいた。ドレ取リ出してと立んとする。肩をおさへて申〳〵。モウ咳は止ました。モウ〳〵〳〵よしになされませ。何いふぞいやい。われは咳はせまいがな。徳兵衛に呑そといふのじや。ドレ。〳〵〳〵。ア、申。徳兵衛様も直つたそふにござります。ひらによしになされませ。テモわれに呑メとはいはぬはいやい。（六十三ウ）アイタ。〳〵〳〵〳〵〳〵コリヤ其様におさへなやい。サア夫レでもお前が立しやる故と。とめるは戸棚を明ケさせぬ。心としらぬ徳兵衛。イヤもふ咳は直つたけれど。アノお北にすへて貰ふは。勿体なふござります。ムン。お北が何で勿体ない。色々の事いふて兎角すへとむながるな。そんならお種にすへさせい。アイ〳〵そんならそふ致しませふ。ナフお北殿。アイどふなと。お前のお気に入た様になされませ。したがノウ長蔵殿。徳兵衛様も灸でまめにならしやんしても。わしや楽しみは一つもない。わしや煩ふて死たいと。箸をからりと投ちらしかつぱと。ふして泣ゐたる。折しも宿老の六郎兵衛。案ン内もなくずつとはいれば。

詞コレハ〳〵お宿老様。よふこそお出とあしらへば。扨久右最前ンはよふわせた。彼今の盗共が。辻に立ッておつたそや。ハア盗ッとは誰レでござります。（六十四オ）ハテ油九が事じやはい。ハア、成ル程。然らば今のを持ッて参りますかな。アノ方へも付届致したりや。町組中も見へる筈で有そな物。イヤ〳〵久右。たつた二人来ましたぞや。そして徳兵衛と久右に逢て。めつきしやつきが有といふたそこで此宿も。コリヤ扱ひ筋じやと思ふて先キへきた。ハア私や徳兵衛に逢ふといふからは。扱ひじやござりませぬ。コリヤ物いひの有のでござりませふはいな。ム、そふかいなふ。ハテそふかとは。町のたばねもなさるゝ様にもない。五音でしれてござりまする。コレ〳〵久右。貴様あぢな事をいやるの。五音ンを聞分りや宿老はせぬはいの。陰陽師の八卦を置ッはいの。ア、こなたは麁相な人じやのと肩肱。地フシハルはつて申さるゝ。

地色ハル久右衛門思案して。詞ヤイ長蔵。モウ灸所じやない。徳兵衛が逢てはやかましい。二かいへなと上ッつてゐい。相手には（六十四ウ）おれがなる。お北よソレちやつと連レていけ。アイ〳〵。サア徳兵衛様ござんせ。ア、いや〳〵。爰はどふもと戸棚の傍離れがたなく見へにける。

地色ハル長蔵が打点き。詞成程旦那のいはしやる通リ。お前に逢すりや六つかしい。やつぱり二かいへござりませ。ヱ、長蔵迄が同し様に。おれもあいつにや言分有。サア夫レでは事が長ふ成ル。ハテ何もかも能見てゐまする。此戸棚の中には。誰もゐやせぬけれどサア私さへ内にゐりやよござります。ナ、申シと教る戸棚を内より明る。ちやつと押サへて出まいぞ〳〵。久右衛門悔りし。詞長蔵。何を出まいとは。ア、いや何。申徳兵衛様が二かいから。出やしやりますなと申事でござります。ハテ仰山な声では有。早ふ徳兵衛を連ていけ。地色ウサア〳〵申と進るお北。そんなら長蔵頼ムぞや。込ンで居まする。いかしやり

ませの目つかひに。點き〳〵二かいのはしごのぼり。（六十五オ）へ詰たる恋の山。

地色中色と欲とに身を絞る油やの九平次が。跡に箱根の三婦六連。お宿老先へござつたのと。のさばり上れば。ヲ、油九。久右も待ッて居らるゝ。爰へござれと譲る座に。九平次が大あぐら。ナニ久右殿。早速ながら此間は。よふ付ケ届して下さつた。扨あの掛地の事でごんす。あの一軸に限らず。惣体若い者共に任せて置ク故。あいらが麁相で取違たかと。内へいんで吟味したりや。内チ蔵に大事にして取て置ィた。けふ爰へ持ッて来ました。請取ッて下され。ハテ渡す物渡すから。借た金戻して下され。男づくで金借ながら。持ッてつくばふとはあぢな事じやノ宿老殿。ア、いや〳〵。そりやおとなしい出よふしや。ナフ（六十五ウ）久右。成程ハテ徳兵衛が預けた掛物。受ケ取ルから金も返す。したか一チ度も二度もこりた物。よふ改めてから受ケとろ。といへば傍から三婦六が。イヤ改めるにや及バぬ正筆じや。此三婦が見て来ました。徳兵衛殿に逢た上。掛物はおれへ戻る筈じや。サ早ふ徳兵衛殿に逢して下され。ム、そふいはしやるこなたは。アイ。おれは天満屋の初が兄の三婦六でごんす。あの妹のおはつに登つて。金を遣はしやる平野屋の。徳兵衛様といふお大尽がだまし込ンで。金目に成あの掛地。すつてに砂にせうとした。あれがないと片かはも組マれぬ故。いかふ案じで居ました。マア正筆の有家が知て嬉しうごんすと。（六十六オ）いへば九平次コレ兄貴。持ッて来た一チ軸は金と引かへ。徳兵衛に返す其上で。貴様が受ケ取りやよいじやないか。知レた事いはずと。おれか男の立ッ様にしてたも。ヤ三婦六。サア成ル程〳〵。早ふ徳兵衛殿に逢たいと。そこらきよろ〳〵見廻せば。

イヤこれ〳〵。ハテ此久右衛門は徳兵衛が伯父。おれが金渡して一チ軸を受ケ取。こなたへ戻しやよいじやないか。イヤ夫レ

計じやごんせぬ。逢にや済ぬ事が有てい。ほんにあさらい盆屋じや。大方二かいでかな。おりる事かならざ。おれがそこへいかふかい。トリヤ引ずりおろしてやらふかと。立をとゝめて久右衛門。ハテ爰なわろはめつそふな。人の内へ始めて来て。断なしに不作法千万ン。シテ徳兵衛には何用有。ヲ、有ル段か。代官所へ連レて行。ヤア〳〵（六十六ウ）代官所へは何ンの為。ヲ、爰の徳兵衛は蜜夫じやと。いふに長蔵軻顔。久右衛門根をおして。徳兵衛を蜜夫とは。ヲ、恟りは尤じや。コレよふ聞ヵしやれ。こちらにきよといお客が有て。妹のお初を女房にくれたら。母者人を養ふて。其上わしが博奕のもとで。胴金迄つゞけふと堅い証文。ハテお初は奉公人。天満屋へ金渡して埒明た。夫レ聞ク と妹めは欠落じや。何が方々へ尋に出すか。おれも其客へ約束か違ふ故。とつくりと詮義すりや。徳兵衛がそびき出したげな。スリヤ蜜夫じや有ルまいか。夫レで引ずりおろそといふが無理か。無理じや有まいがのと。腕まくりして罵れば。

ヲ、そふいやりや無理ではないが。コレ。爰にござるは此町（六十七オ）のお宿老。スリヤでんども同し事。徳兵衛がお初をそびき出したといふには。何ぞ慥な証拠が。ヲ、おれも人にしられた男じゃ。前先キの見へぬ事はいはぬ。其証拠はお初ッのお客が持ッてじやわいの。ヲ、其客爰へ連レておじや。ハ、、、其客爰に居まするとも。頤つき出す九平次に。長蔵も恟りし。コレ九平次殿。扨はこなたも客じやよな。ヲ、お初を女房に貫ふたといふ。親兄の証文。コレ爰にと懐より。取出せば。ドレ夫レを。イヤ夫レから御らふじ。ハ、、、、大事の物じやによつて。人手には渡されぬ。まだ外にコレ。慥な証拠と押シ披き。

ヱ口は読に及ばぬ。入事計よふ聞しやれ。生玉にての様子。最早男は立申さず候。其上其元に借リ申候一軸。急に詮義も成

かたく。内（六十七ウ）の首尾兄貴の手前。彼レ是顔も立がたく。相果る覚悟極め申候。そもじと一チ日成共夫婦に成度ク候へば。晩方其元へ参り。首尾見合せ連立退申べく候。もし間違候て逢ハれぬ時の為。一ト筆しらせ申候。お初殿へ。平野屋徳兵衛。なんと。此手に見しりが有ふお宿老。よふ聞置ィて下されや。ナア三婦。妹聟の此九平次。真直な者じゃあろがの。蜜夫したり衒をしたり。ノウ宿老殿。此町にはあぢな者を置しゃるのと。ひやうまづいても宿老は一図。ハテ油九何いやる。そんな事吟味すりや。どこの町も皆明キ家に成わいのと。いふも構はす久右衛門。イヤ何九平次三婦。お初を徳兵衛か連て退たら一所（六十八オ）に居る筈。成ル程徳兵衛は内にゐる。そしてもふ手を切ッたといふて居れば。あれがしらふ様はない。お初が詮義はそつちで仕や。ムンそんなら爰の内には。徳兵衛計でお初はゐぬの。ハテくどい〳〵。ムヽよい〳〵。コレ三婦。居るか居ぬか家捜仕やいの。ヲヽ夫レがよかろと立上るを。長蔵が押シ隔。めつたに家捜さす事ならぬぞ。ムン家捜をさすまいとは。どふでもくさい三婦六。ヲヽ合点とふり放す。イヤ〳〵させぬと長蔵が。とめる心は戸棚の内。それとはしらぬ久右衛門。ハテ面晴しや家捜させい。ハアいや〳〵申。左様ではござりませぬ。成ル程家捜さしましても。お初殿は此内にないは定。ナ夫レは夫レで済ム（六十八ウ）けれど。アレ徳兵衛様が書しやつた今の状。もしでんどへ出る時は。ハテ公事は丸ふてこけやすい。ナどふこけてとふなろもしれませぬ。九平次殿が今の状。でんどへ持ッて出やしやるか。何ぼあの掛物を持てござつても。一旦すりかへたといふ越度。ナそれをこちから申て出るか。スリヤあつちも又どんな難義が出来ふも知レぬ。爰は互に折レあふて。下で済御了簡が。ナア申。お宿老様。ハヽこりやきつふ入組ンだ。おりやどふがよかろ共分別にあたはぬわいの。九平次。貴様はマどふ思やると。首傾てもないちゐは。生れ付キとぞ見へ

にけり。

九平次火皿の目を細め。ム、始めから其様にいふて出れば。こつちも無（三十九オ）理な事はいはぬ。両方の町を騒がしても。ナア三婦。サアおれも顔がよごしともない。ヲ、それ〳〵。そふじやによつてかふせうはい。久右衛門殿から一ッ札かいておこしやるなら。了簡せう。ノウお宿。ム、そりや又何を書ヵすのじや。ハテ徳兵衛に借シた金受取て。預かつた掛物。すりかへたと申シたは。此方の誤り。又徳兵衛がお初にゆびでもさし候はゞ。其時は存分ンにせいといふ証文じや。夫レ合点ならでんどへも出ぬじや迄。ホ、夫レよかろ。久右衛門殿。書しやるかと。宿老が挨拶長蔵も。成ル程〳〵。丸ふ納る事なりと。傍なる硯を指寄せて。

申シ旦那様。お聞なされてござる通り。書ィておやりなされませ。ナニあんだらを尽しおる。（六十九ウ）おりや聞て居て涙がこぼれるはやい。何やかや思へばこそ。じつと堪忍してゐるはい。工み事にかけられ。誤り証文迄書ィてやつて。此久右衛門どこで立ッ物。お初さへ此内にゐにや。どこへ出ても言晴は立。存分ンに家捜させい。お初が居ねばおれも又。存分ンにせにや置ヵぬと。言ィつゝ戸棚に立かゝるを。長蔵が押シとゞめ。コリヤマア何をなされます。何をするとは胸がすはつた。お初が居ぬとあいつらが。胴腹を突通す。脇差爰にと立かゝる。サア〳〵申シ。其御短慮が気の毒さに。お留申スといはせも立す。ヱ、面倒なとふり放し。明ク る戸棚にかゞんだお初。シヤ是はと驚 戸をぴつしやり鞆て。暫し詞なし。

夫レなア。申シあれじやに（七十オ）よつて留ましたと。いへど九平次しらぬ三婦。顔見合せてせゝら笑ひ。ハ、、、、ム、、、おどしやるがこはいとて。家捜を得せまいか。ドレもく割て見せふぞと。二人が立ば長蔵が。暫し〳〵も聞入レ

ず。コリヤ〳〵〳〵長蔵ハテ久右衛門がせいといふた。夫レで捜すがなぜ留る。サア〳〵今のは。当座の腹立から申された。マア〳〵待ッて下さりませ。ムンそんなら証文書するか。成程〳〵。申シ〳〵旦那様。お慈悲と思ふて虫をしなし。お書キなされて下タさりませと。いふにぜひなく久右衛門。ハ、、、、。今の様に腹立たも。証文ンを書た跡で。あの久右衛門は男じやないと。笑はれふかと思ふてナ。態今の様にして見せた。おりやモウ〳〵。とをから証文ンを書ク気じやと。さし俯ば長蔵も倶にしほれ（七十ウ）て居たりしが。爰ぞと長蔵気を取直し。イヤ申お宿老様。証文ンを書ふと申されます。ヲ、よかろ〳〵。コレ油九。夫レでよいかの。ハテ証文ンを取ッたりや金も請取。一軸も渡すわい。したが。得しれぬ文ン段で日がくれた。長蔵火をともさぬか。ソレ〳〵ほんに大事の証文。暗ふては書れまい。行燈を出そと長蔵が。行を引キとめ久右衛門。爰は端近奥で書ふ。いか様夫レもよござりましよ。コレ〳〵女房共。お種。〳〵と呼出し。夫レマア雨戸をはよふしめ。アイ〳〵。ほんにマアけふの日は。早ふ暮た事では有ルと。いひつゝしめる奥座敷キ。サア〳〵あれへと長蔵が。すゝめる詞に九平次三婦。お宿クもござれと立上れば。ヲット〳〵。したが（七十一オ）おりや何やら忘レた様な。ソリヤ何を。ハテ大まいの事か内輪で済。祝ひ酒も出そな物。怪我な事茶を一ぷく。夕飯にさへはづれた腹。破行燈とはり合と。つぶやき〳〵打連レて一ト間へ。へ伴ひ入にけり。雨戸の。外は。薄ぐらき。恋路の闇の椽伝ひ。戸をそろ〳〵と徳兵衛は。お初が手を取イミて。ヲ、よふ脇差も気が付ィた。兄長右衛門殿が。幸右衛門を切ラしやつたも。皆そなたやおれが為。其上に又内のしだら。どふも生キては居られぬ品。サアわたしも思案を極めて居る。早ふ爰をと夕露の。庭に二人が囁く後。

手燭をさげて久右衛門。つつと出ればヤア親父様。久右衛門様か。シイ。声が高いと押しづめ。ム、是程に迄思ふてゐる二人リが中。（七十一ウ）そふとはしらすアノお北を貰ふて置ィた。とをからしつたら何ンの貰はふ。一貫目や二貫目で埒の明事なら。コレお初。こなたの隙を貰ふてノ。徳兵衛に添そ物。互に義理が立タぬと思ひ。ひよつと心ン中やなど仕やせぬかと。ほんに〳〵夜の目も合ず。まんじり共得せぬはい。必無分別な事してたもんなや。ヤ。したがコレお初殿。戸棚の内で聞て、あらふ。徳兵衛とはモウ添れぬ。親達チやあの三婦が。九平次に契約して。堅い証文ン持てゐる。スリヤ是男の有ルこなた。此様に二人が寄ッたを見付ケるとノ。不義者に成ルぞや。徳兵衛が不便ならコレ。思ひ切ッてやつて下され。ヤア。頼ます〳〵。コレ年シ寄が手を（七十三オ）合します。コリヤ徳兵衛もそふ心得。お初が可愛か思ひ切レ。ヨ。ヨ。此おれが先キへ死ンで。香花をそちに取ッてもらをと思ふてゐる。必々逆様な。回向をさせてくれなよと。二人が背を押シ撫て跡は。詞も涙なる。徳兵衛も今更に。聞程胸にせく涙。じつと押サへてコレお初。さつきにからいふた通リ。親父様の傍での。ハテおれも思ひ切ル程に。そなたも思ひ切ッたといや。ヱ、イ。はてそれ。思ひ切ましたと。つゐいやいのと教れば。アイ。〳〵。思ひ切リました。ヲ、。二人リながら合点がいたか。ヲ、〳〵嬉しい〳〵。じやがそふ計では落付カぬ。何ぞ慥な証拠は是にと徳兵衛が。首にかけたる守リより。一ッ札を取出し。久右衛門が手に渡せば。

コリヤ何じや。アイ二人か中の起請でござ（七十二ウ）ります。ヲ、そんならお初殿。こなたも有ルか。アイと同しく渡すれば。どれ〳〵と手に取て。コリヤ二人リ共かふ成ル上。ひよつと辻かいもとで逢たり共。物もいふな。顔も見な。かふいふわしが胸の内。推量せよととふとふし暫シ。詞はなかりけり。

徳兵衛は思案して。コレお初。是迄の縁じやと思ひ。諦てサア早ふいにやと。袂をひかへしらすれば。お初は漸。立上り。徳兵衛様。モウおさらばと。なく〳〵も帰るふりして窺ひゐる。

折節奥より九平次が。久右殿〳〵と呼声に。ヲヽそこへ。モウそこへ。コレ徳兵衛おれは奥へいく程にそなたは是から二階へいきや。ハテいきやいのと無理やりに。すゝめ立ればぜひなくも。後へ隠す脇差を見付ケ（七十三オ）られじと跡に付ク。コリヤ必おれが行迄に。二かいからおりるなへと。いふもせはしく呼立る。トリヤ〳〵それへ参らふと。雨戸をしやんと。内に入。

やゝ時うつる其隙に二かいを出て。やね伝ひ。塀に漸徳兵衛は。声をひそめて。お初〳〵。ヱヽ徳兵衛様ンか。暗ふて何にも爰からはと。尋るこなたに物干の。柱をつたふ蔦かづら。下には見付てアヽあぶなと。あせる其間におり立て。一息ほつとつぐ折から。

雨戸の方に火のかげが。誰やらくると忍ぶ身を。夫レとはしらず嫁のお北。手燭吹キけし。涙をとゞめ。

テモ扨も。徳兵衛様ンがいつにない。かはいらしい事いふてゐて。わしをだましてとこへやら。ハアそふじや。どふで女夫に成ッては下さんすまい。生キていて何ンの（七十三ウ）楽しみ。とはいへも一度伯父様や。徳兵衛様のお顔が見たい。見たいわいのと泣声を。よそへしらせじ聞せじと。声を忍びの隠し泣心ぞ。思ひやられけり。

かく共しらす久右衛門。雨戸をさぐり聞耳立テ。コレ〳〵お初。まだそこにかと尋る声。ヱヽイとお北が恂りする。口に手を当これ〳〵お初殿。さつきには思ひ切た様に見せ。隠レさしやつたを見て置ィた。夫レ程に思ふ中を。無理に裂たら

此上に。どんな事が出来ふも知レぬ。マアかふせふと思ふわいの。アノお北をノ。在所へいなし。こなたと徳兵衛と女夫にしませふ。ヱヽ。ハテ扨大きな声仕やんな。奥へ聞へる。ハテ何が悲しうて。其様にないじやくり。ヲヽ〳〵。ム、嬉し泣か道理〳〵。したが爰においては。九平次や兄が見つける。（七十四オ）よい〳〵。裏から隣へいて預ケておこ。サア〳〵早ふと連レて立。お北をお初と思ひの余り。情も余る忝け涙。徳兵衛お初は手を合せ。拝む片手を取々に。表テの方へ出て行。

様子を聞ィて九平次が。雨戸蹴放し飛ンで出。お初はやらぬとさぐる手に。お北を捕へて逃出る。どつこいさせぬと長蔵が。首筋つかんで打チたをせば。コリヤたまらぬと九平次が。一軸大事と引ッかゝへ。逃ゲ出す跡から長蔵が何国迄もと追ッて行。おはつはおれがと三婦六が。取付ク後を久右衛門。やらぬ〳〵も我武者の三婦。はづみを打ッてねば土へ。おのがちからでまつさか様。其間にお北はのがれ行。コレ〳〵お初ッと久右衛門あとをしたふて三重へおふてゆく（七十四ウ）

道行　思ひに入ル物

此世のなごり。夜もなごり。死に行身をたとふれば。あだしが原のみちのしも。一トあしづゝにきへて行。夢の夢こそあはれなれ。あれかぞふればあかつきの。七つの時が六つなりてのこる一トつが今生の。鐘の響の聞おさめ。じやくめつ。ゐらくと響なり。鐘ばかりかは。草も木も。空もなごりと見あぐれば。くも心なき水の音ほくとはさへて影うつる星のいもせの天の川。梅田のはしをかさゝぎのはしと契りていつまでも。（七十五オ）われとそなたはめうと星。かならずそふとすがりより。ふたりが中にふる涙かはのみかさもまさるべし。むかふの二かいは。なにやとも。おぼつかなさけさいちうにて。

またねぬ日影こへ高く。今年の心中よしあしの。ことの葉草や。しげるらん。聞に心もくれはどりあやなやきのふけふ迄も。よそにいひしがあすよりはわれもうはさはさの数に入り。世にうたはれんうたはゞうたへうたふを聞ケば。どうで女房にや持やさんすまい。入ラぬ物しやと思へ共。げに思へ共歎け共身も世も思ふまゝならず。いつをけふとてけふが日迄。心の延しよはもなく。思はぬいろに苦しみに（七十五ウ）どふしたことのゑんじややら。わするゝ隙はないはいな。それにふり捨行ふとは。やりやしませぬぞ手にかけて。殺して置ィて行んせな。放ちはやらじと泣ければ。うたも多きにあのうたを。時こそ有レこよひしも。うたふはたそや聞クはわれ。過キにし人もわれ〳〵も。一トつ思ひとすがりつきこへもおします歎しが。誠にことしはこなさんも廿五才のやくのとし。わしも十九のやくどしとて。思ひあふたるやくだゝり。ゑんのふかさのしるしかや。かみや仏にかけ置キしげんぜのぐはんも今こゝで。みらいへゑかうしのちのよもなをしも一トつはちすぞやと。つまぐるしゆずの百八に涙の玉の。数そへて尽せぬ。あはれつきる道。いつはさもあれ。（七十六オ）此よはゝ。せめて暫しはながからで心もなつのよのならひ。いのちおはゆるとりのこゑあけなばうしや天じんの。もりで死んと手をひいて。むめだ。〳〵つゝみの。さよがらすあすは此身を。ゑじきかと。はかなき思ひかずそひて。つきせぬあはれ。つきる道行なやみたるおりからに。はるかあとより人よぶ声。そのなはさだかならね共はやおつてかとむなさはぎ。見付られじとなたねばた。おはつがしのへば徳兵衛は。あたりに。しげるあをやぎを。是さいはひと手をかけてよぢ登たるさゝがにや。こずへの糸の葉隠れに身をひそめてぞ。三重〳〵かくれ居る（七十六ウ）

浅からぬ契りをよそに身一つの。うきも。つらきも儘ならぬ。妹背の縁も名計りの。嫁のお北は突詰し。胸の思ひに責られ

て若木の花を我ひとり散さん物と忍び出。堤伝ひにたどりくる。うきふしに竹の。杖さへ月も早。いるにゐられす宿を出。涙片手に小挑燈。子故の闇の。道照し。尋来るは久右衛門思はずはたと行あたり。互に顔をすかし見て。ヤアと、様か。そちやお北か。是はマア大たんな。此くらいのに只一人リ何故爰へおしやつたと。聞より涙。しやくり上ケ。何故とはどうよくな。宵に雨戸の椽先ていはしやんしたを覚てか。わしを在所へ追いなし。おはつ様と女夫にせふといはしやんした。夫レを聞たらハアはつと悲しいやら。無念なやら。面目ないやら苦しいやら。私が胸の。コレ爰を。思ひやつて下さんせ。お前さへ（七十七オ）あの気しや物徳兵衛様ンか私を。嫌はしやんすが無理ではないと。ひんとすねたる恨泣。袂ひる間はなかりけり。

久右衛門も倶涙目をすり赤めてヲ、道理しや〳〵。去ながらそなたを在所へいなそといふたは。二人リの命取とめふ為計リ。常々孝行なそなたを何の憎まふ様はなけれど。何をいふても徳兵衛が死では闇じやはいの。但シあれが死ンでも。そなたは悲しうないか。ハテながらへてさへゐるならば。後々はお初にことわけいふて。そなたを添せふたりながら。女房にする仕様も有ロと。思ふていふた事じやはいの。ア、かはいや。折悪ルふなんぎな事計リて。いつその事死でのけふと。思ひ詰たも道理しや。道理しやと思ふ程。おりや気つかひで〳〵どふもならぬはいの。年ンシ寄ッた此久右衛門。女房はなし外に子はなし。杖にも柱にもアノ（七十七ウ）徳兵衛一人リを便リ。かたはな子が可愛と朝晩の看経にも。後生の事は根ッから頼まず。あれが心を改メ実体に成て名跡を。継様にして下さりませと。頼まぬ日迚はないわいの。是程に思ふおれを捨置。死なふとはあんまり気づよい。徳兵衛胴欲じやはやい。譬死ぬるぎりが有ふと親の心の百ぶ一。ちつとは又おれが事。思ふて

くれぬはどうよくと。いふ声涙にむせ返り身も浮ク。計に泣ゐたる。親のじひ心ン徳兵衛が五臓六腑にしみ渡る。身をふるはして泣涙茂みに。洩てばら〳〵と。空にしられぬ。梢の雨。顔にかゝれば久右衛門袖打払ふてコレ〳〵お北。俄に時雨がするそふなの。イヱ〳〵。空はさへてござります。ホンニなふ。でも此濡たはヱ、聞へた。こりや柳の露じやはいの。成程露でもござりませふが。袖や袂のかう（七十八オ）濡たは。今おまへのお歎キ故。其お心とはしらずして。私がお恨勿体ない。御赦されてと計にて涙と倶に詫ければ。ホウすりや得心仕やつたの。嬉しい〳〵。サアそんならそなたも倶々に。尋て見よふサアおじやと。立上りしがひよろ〳〵〳〵。どふど転へば。ヲ、あぶない。けがなされなと引起せば。イヤけがはせぬが。一樹のかげの舎も。他生の縁といふ譬が。アおりやとふやら此柳の傍が離にくいと。言つゝ又も立上り。そろり〳〵と二タ足三足。ふり返り見る青柳の茂みの露が形見共。しらぬが闇ようば玉の。嫁のお北は手を引イて。梅田堤を真直に。行が此世の名残とは。後にぞ。思ひしられたり。

かけも見へねば徳兵衛柳の本トにおり立テば。お初も頓て走リ出。跡見送リて伏シ拝〳〵果し。涙にくれけるが。早更渡る。さよ嵐心も空もかげくらく風しん。〳〵たるそね崎の。森を目宛にこなたへと打連レ。てこそ。三重（七十八ウ）

十冊　曽根崎の段　森に入ル物

へ行水の。音もすゞしき。蜆川。堤をこへて下タ原の。在をしるべに遁れんと。九平次が狼狽眼見付ケたのがさん待チ上れと。声をかけて長蔵が息をはかりにぼつ付て。ヤアけちぶとい泥坊め。大切ッな其一軸徳兵衛様が段々の難ン義と言イ。京の兄御長右衛門様迄桂川へ身を投て。死しやつたとの風聞。かふいふ事も皆おのれらより発る事。サア尋常にそれ渡して腕

廻せ長蔵がしごきにかける。ヤアちつぺいめがゑらいほうげた。うぬが様なちよつかいに合よふな九平次じゃない。ならば手柄に取ッて見（七十九オ）い。取ッて見せふと飛かゝり。摑腕先キ引はづし。真向くはつしり胸づくし。取ル間も下手に腰にさす。一チ軸たくつて突飛せば。透さず髷かい摑ミ。打合捻合髻髪取ッつ取ラれつこりゃ〳〵〳〵。どつこいさせぬとふりほどき。飜ればかけ寄むしやぶり付組づころんづ。こんづを流しひるまずさらずいどみしが。双方ごかくにもみ合拍子。九平次がきゝ足を。堤の原に踏込で尻下ガりにひよろ〳〵〳〵。ひるむ所を押シ付捻すへ。乗ッかゝり早縄たぐり高手小手にくゝし上。落たる一軸星明カりにすかし見るより拾ひ取リ。始終は御前で白状さす。コリヤいぢばつてももふ叶はぬ。うせふ〳〵としばり縄引立てこそ三重へ急行。

神ならぬ身は。斯ぞ共。知ラれず知ラぬふたり連。社のこなた（七十九ウ）にたとりつき。

かしごにか爰にかと払へば草に散露の。我より先キにまづ消へて。定めなき世は稲妻かそれかへあらぬかア、こは。今のは何といふ物やらん。ヲ、あれこそは人ト魂よ。今宵死るは我のみとこそ思ひしに。先立人も有リしよな。誰にもせよ死出の山の伴ひぞや。なむあみだ仏〳〵の声の中。哀れ悲しや又こそ魂の世をさりしはなむあみだ仏と唱ふれば。女は愚に涙ぐみ。今宵は人の死る夜かや浅間しさよと涙ぐむ。男涙をはら〳〵と流し。二つ連レ飛人魂を余所のうへと思ふかや。正しうそなたと我たまよ。何なふ二人リの魂とや。早我々は死たる身か。ヲ、常ならば結びとめ繋とめんと歎かまし。今は最期を急ぐ身の魂の有家を一つに住ん。道を迷ふな違ふなと。抱キ寄（八十オ）肌を寄セかつぱと伏シて。泣居たる二人の心ぞ。不便なる。

涙の糸の結び松しゆろの一ト木の相生を。連理の契に准へ露の憂身の置所。サア爰に極めんと。上着の帯を徳兵衛も初も涙の染小袖。脱イで掛たるしゆろの葉の其玉へはゞき今ぞげに浮世の塵を。払ふらん初は袖より剃刀出し。若シも道にて追ッ手かゝり別レ〳〵に成ル迚も。浮名は捨じと心がけ剃ミ刀リ用意致せしが。望の通り一所に死る此嬉しさと言ければヲ、神妙頼ノもしし。さ程に心落チ付からは最期も案ンずる事はなし。去リながら今はの時の苦患にて。死姿見苦しと言れんも口惜し。此二タ元の連ン理の木に骸をきつと結ひ付。潔ふ死ヌまいか世に類ひなき死様の。手本ンとならんいかにもと浅間しや浅黄染。かゝれ迚やは抱帯両方へ引ぱつて。剃刀取ッてざら〳〵と。帯はさけても主様ンと私が間タはよもさけじと。（八十ウ）どうど座を組二タ重三重ゆるがぬ様にしつかとしめ。能しまつたか。ヲ、しめましたと。女は夫の姿を見男は女の体を見て。こは情なき身の果ぞやとわつと泣キ入ル計也。ア、歎かじと徳兵衛。顔ふり上て手を合。我幼少にて実ト の父母に放れ。伯父と言イ親方の苦労と成ッて人と成。恩も送らず此儘に。亡跡迄もとやかくと。御難儀かけん。勿体なや。罪を赦して下されかしまだ其上に兄人の。段々のせはになり。立テし誓も破たれば。嘸や憎しと覚すらん。是も。是よりお詫を申す。冥途にまします父母には。追付お目にかゝるべし向へ給へと泣ければ。お初も同じく手を合せ。こな様はうらやましいめいどの親御に逢ハんと有ル。わしがと、様かゝ様はまめで此世の人なれば。いつ逢フ事の有ルべきぞ便リは此春聞イたれ共。逢たは去年の初ッ秋の初が心中取ざたの。あすは在所へ（八十一オ）聞へなばいか計かは歎を掛ん。親達へも兄弟へも是から此世の暇乞。責て心が通しなは夢にも見みへてくれよかし。なつかしの母様や名残惜シのと、様やと。しやくり上〳〵こへも。おしまず泣ければ。夫ト もわつと叫入泣涕こがる、心いき断せめて哀レ也。

いつ迄いふてせんもなし。早々殺して〳〵と最期を急げば心へたりと。脇ヵ指するりと抜ヵ放し。サア只今ぞなむあみだ。仏〳〵と。いへ共遺此年月いとしかはいとしめて寝し。肌に刃が当らりよかと。眼コもくらみ。手もふるひ弱る心を引直し。取直しても猶ふるひ突とはすれど切先は。あなたへはづれこなたへそれ。一三三度ひらめく剣ヵの刃。あつと計に咽ぶへに。くつと通ればなむあみだ。〳〵なむあみだ仏と。くり通しくり通す腕先ヵも。弱るを見れば両手をのべ。だんまつまの四苦八苦哀といふも。〳〵余り有。

我迚もおく（八十一ウ）れふか。息ヵは一ヵどに引取ラんと。剃刀取て咽に突ヵ立。柄も折レよ刃も碎と。ゑぐりくる〳〵目もくるめき苦しむ息ヵも暁のちしごに連レて絶果たり。

かゝる所へ久右衛門長蔵諸共天満やの亭主も追々欠付て。なむ三宝遅かりしと。悔にかいも嵐吹ク。森の下露消失し昔シ語りを聞伝へ書伝へたる筆の跡恋の。手本ンとなりにけり

宝暦十一年辛巳五月十八日

作者連名

若竹笛躬
浅田一鳥
福松藤助
黒蔵主
中邑阿契

（八十二オ）

右謳曲以通俗為要故文字
有正有俗旦加文采節奏為
正本云爾

高弟　豊竹越前少掾
　　豊竹筑前少掾

江戸大伝馬町三丁目　鱗形屋孫兵衛版
大阪心斎橋南四丁目　西澤九左衛門版

（八十二ウの跋文は前号の解題中に記した。）